

# 経塚古墳についての予察

吉 岡 弘 樹

- 
- |          |                  |
|----------|------------------|
| 1. はじめに  | 4. 八角形墳の分布と築造の意味 |
| 2. 古墳の概要 | 5. まとめにかえて       |
| 3. 築造の企画 |                  |
- 

## 1. はじめに

八角形墳の研究は、数年前までは近畿地方の天皇陵を中心とした西日本特有のものとして研究が進められてきた特殊な分野ということで、東日本では注目度の低いものであった。このような状況の中、1991年、東京都多摩市で稲荷塚古墳が、翌92年、群馬県吉岡町で三津屋古墳が八角形墳であることが調査によって判明し、東日本においてもその存在が明らかとなったのである。

経塚古墳においては以下のような経緯で発掘調査が開始された。

山梨県林務部は「山梨幸住県計画」に基づいて「森林と水のプロムナード（仮称）整備事業」と称して森林公園の建設を計画した。これは、御坂・一宮・石和の三町にまたがって笛吹川に流下する金川両岸に広がる水害防備保安林の内、約3.8haを保健休養の場として有効利用しようとするものである<sup>1)</sup>。当初より経塚古墳は、公園のメインエリアの中にあることが幸いし、保存復元がされることが決定された上で1996年4月より、発掘調査が開始されることとなった。古墳の存在は戦前から知られていたが、文献に紹介された最初は1975年に小林広和氏によるものであり、この時点では墳丘裾に列石が廻る後期あるいは終末期に属する円墳であるという解釈が為されていた<sup>2)</sup>。その後は今回の調査に至るまでは一部の地元関係者のみの間で、比較的良好な残存状態の古墳という認識を持たれていたに過ぎなかったのである。

本稿では、1997年7月に刊行した発掘調査報告書では取り上げきれなかった課題を提示すると共に若干の予察を行うことにしたい。

## 2. 古墳の概要

古墳は、御坂山塊を源とし笛吹川に急勾配をもって下る金川の右岸、一宮町国分字経塚の標高約347m地点に位置している。周辺には金川を中心軸として放射線状に塩田・長田・四ツ塚・錦生・国分などの後期・終末期の古墳群が分布をみせ、東方600～800m圏内には8世紀中葉創建とされる甲斐国分寺・国分尼寺の存在が明らかとなっている。

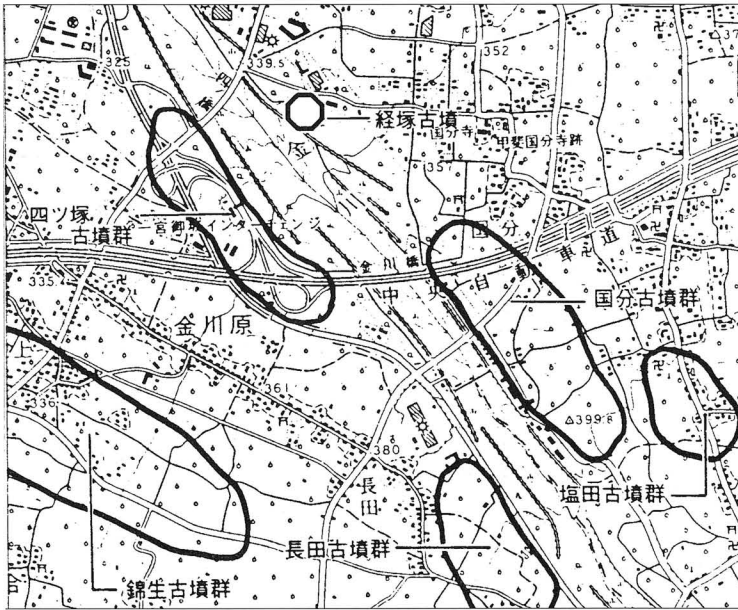
墳丘は、8辺からなる外護列石と中段列石、平面形の不明な上段列石の、三重の列石を主構造物として築成されている。そして、それぞれの列石間は下方においては10cm程の砂質土＋粘質土の版築層を設けた上に人頭大の円礫を30cm厚に組み合わせるように敷き詰め、上方は砂質土を15～25cmに版築の互層を形成させ、墳丘の崩落を抑制している。

外護列石は、化粧的要素が色濃く感じとれるもので、対辺長約12m、対角長12.5mをもって

開口部周辺ではやや小振りな50cm程の自然石を小口積みにし、後方には大型の葺石を中段列石に向かって構築している。両側面－背面では1m程の大型の自然石を所々に横口積みに配置

し、全面とは様子が全く異なる。

中段列石は外護列石の内側1.80mに全て小口積みで廻り、対角長約8.0m、対辺長約8.6m、高さ平均0.88mを測る。検出状況は良好であったが、内側および上方から非常に強力な土圧を受けたと考えられ、全方向にラップ状に開いていた。基底部石は、古墳の基礎部分の一部を司る人頭大の円礫層上に設置されていた。当列石は、外護列石の墳丘の崩落を防ぐと共に、見せる



第1図 金川周辺の古墳群と経塚古墳位置図 (S=1/25,000)<sup>3)</sup>

要素をも多大に含んだものと違って、墳丘内の土止め効果を向上させるための内部構造と捉えることができる。さらに、平面形をみると稜角 $130^{\circ} \sim 140^{\circ}$ 、辺長2.44～4.0Mの範疇となり、外護列石よりも、正八角形に近い平面形をとる。

上段列石は、墳頂部の表土直下に直径約5mの規模で検出された。良好な部位は東側に残存する。築成段数はいずれも1～2段で小口積みの様相をみせる。中段列石と同様に、墳丘内の構造物として構築されたものであろうが、ほぼ墳頂部にあるため土止め効果は希薄であったことが推測される。平面形は不明である。

その他、古墳の南西端に約4.80mに渡って、直形1m弱の円礫が直列に配置された石列が検出された。これは古墳が南東から北西に緩やかに傾斜した地形に築造されているために、墳丘の崩壊しようとする力が最低海拔高度地点・稜角G付近に多大に加わる。そこで、この力を分散させるための裾押さえの役割を果たしているものとして設置されたと考えられる。

主体部は山梨県下においても一般的にみられる両袖型横穴式石室である。

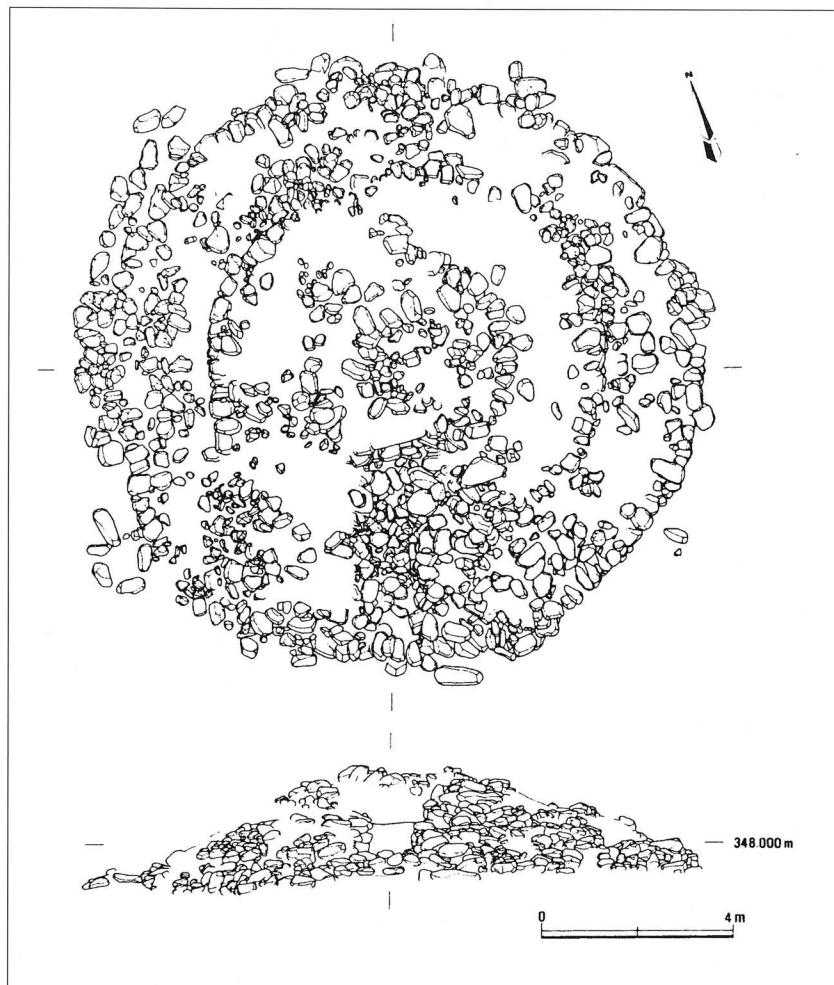
玄室のプランは胴張り形状を有し、長さ3.00m、奥壁幅1.20mで最大幅は奥壁より1.60mの部分で1.76mを測るものである。天井石は大型の自然石を加工せずに用いている。奥壁より4枚目までは良好に築造時の状態を保っており、それぞれ側壁との接点部分は挙大から人頭大の円礫が詰め石として充填されていた。高架状態も良好で奥壁より2・3枚目に最高位(1.61m)をもつアーチ状を呈する形状をとり、高架技法は一般的な持ち送りが採用されている。玄室空間の高さは主軸線上で1.47～1.61mを測る。奥壁は、5枚の自然石を使用して構築されている。



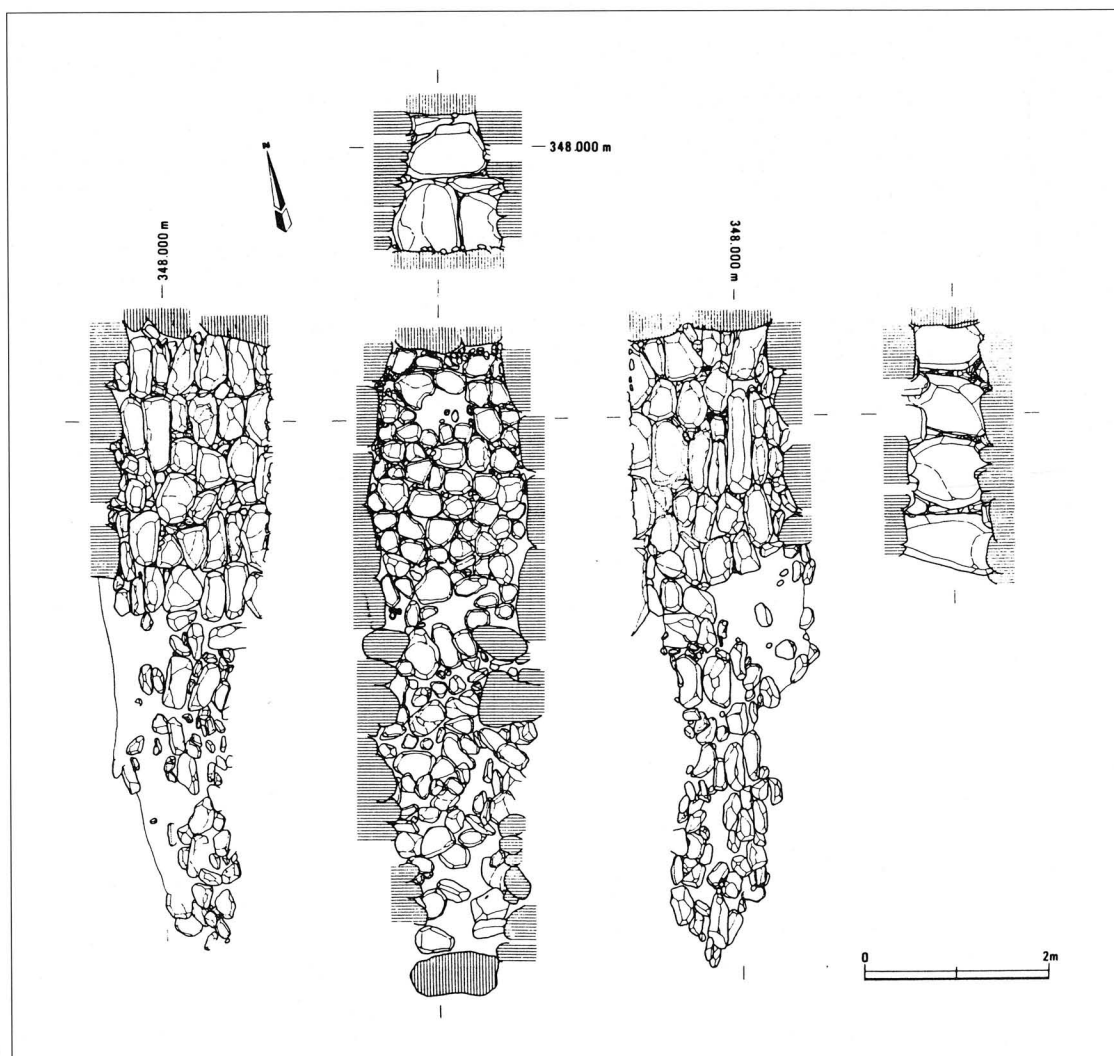
第2図 墳丘（上空より）

内訳は、大型の扁平な3石を主として残り2石を挟み石として使用している。側壁は奥壁との接点付近で1.50m、最高点は奥壁より3石目で1.65mを測る。構築方法は基底部には小口積み、中段部では横口積み、天井付近では天井石を高架させるための調整石的な意味合いを持たせるための小口積みが採用されている。また、各所に縦目地の通りがみられ、“はらみ”の原因となっている。袖石は両側とも0.7×0.6程の直方体に近い自然石を直立させている。

羨道は、長さ3.60m、幅は袖石付近で0.68mを測るが、両側壁共に崩壊が著しく、袖石より約1m付近が辛うじて残存していたに過ぎない。側壁を



第3図 墳丘平・立面図



第4図 石室平・断面図

構成している礫は袖石より約1m程が基底部石を含め、玄室と同様に大振りの礫を設置し、それより前方について崩落した礫の様子からは50cm以下のものを用いていたと推測される。床石は粗雑な貼り方ではあるが全面に施され玄室床面との比高差は約25cmを測る。外護列石との接続部は袖石付近より若干幅を狭める形状をとる。また、羨道の中央部より、50～70cmの偏平な隅丸方形あるいはティアドロップ型の自然石を4、5段に開口部に壁を造るよう約1mに渡り積み上げられている閉塞石が検出された。さらに、この壁になる面は中段列石のA-B辺の一部を構成しているものである。

副葬品は築造時のものとして閉塞石下部より出土した鉄斧1点のみである。

### 3. 築造企画

八角形墳に限らず六角形・多角形墳の研究で重要な位置を占めるのが築造に対する企画性である。ここでは、当墳についても他墳で示されているような企画があてはまるのか考えてみたい。しかし、厳密に正八角形とは言い切れず、脇坂光彦氏が地方の八角形墳の特色のひとつとして挙げている“正確に八角形を呈しているものはない”にあたるものであろう<sup>4)</sup>。このため、企画性を考えるのは容易ではないことをあらかじめ断わっておく。



第5図 外護列石・中段列石・石室基底部石検出状況

別記のデータをみている限り、稲荷塚古墳<sup>5)</sup>や山中荘園古墳<sup>6)</sup>のように唐尺（1尺=29.7cm）や高麗尺（1尺=35.5cm）を用いたり、比率などから企画性を導き出すのは非常に難しい。このため、全体から総合的に判断するのは避けることとし、石室と外護列石・中段列石に分解してみることにする。

#### —石 室— 第6図—1

石室主軸方向のラインを辺A-B・F-Eのそれぞれに延長し、その中点を求めると丁度、奥壁より羨道部に向かって1.00mの位置となる。また、辺A-Bとの接続部は、他の六・八角形墳に採用されている稜角や辺の中央に設計されたタイプと異なり、稜角A寄りの辺の1/3といった変則的な位置に主軸が求められていることが分かる。

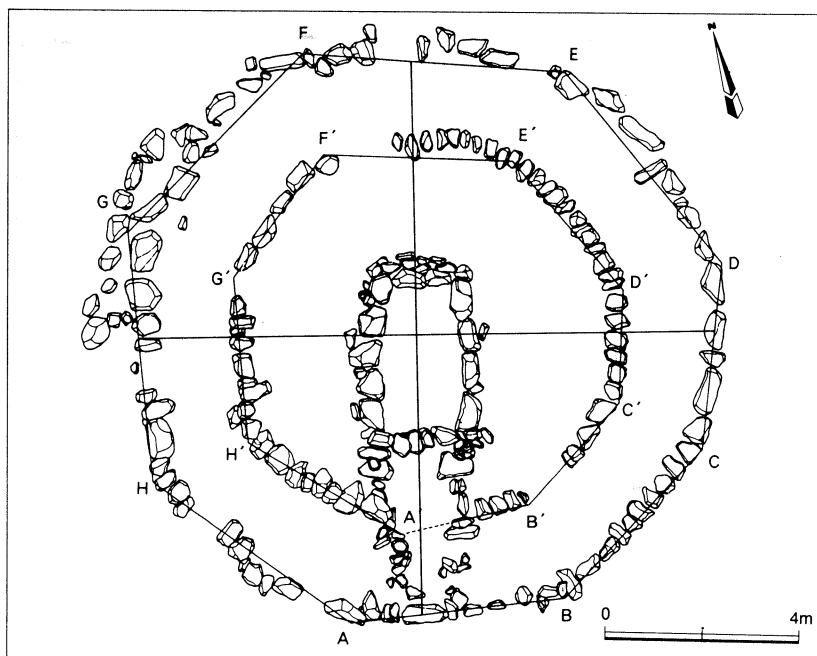
#### —外護列石・中段列石— 第6図—2

それぞれ対応する辺の中点同士を結線し、重心を求めると石室主軸より求めた中心より東南方向約80cmの右側壁寄りにズレた位置（O）にはほぼ一致する。また、外護列石と中段列石の角度的なズレはほぼ10°以内であることも分かる<sup>7)</sup>。

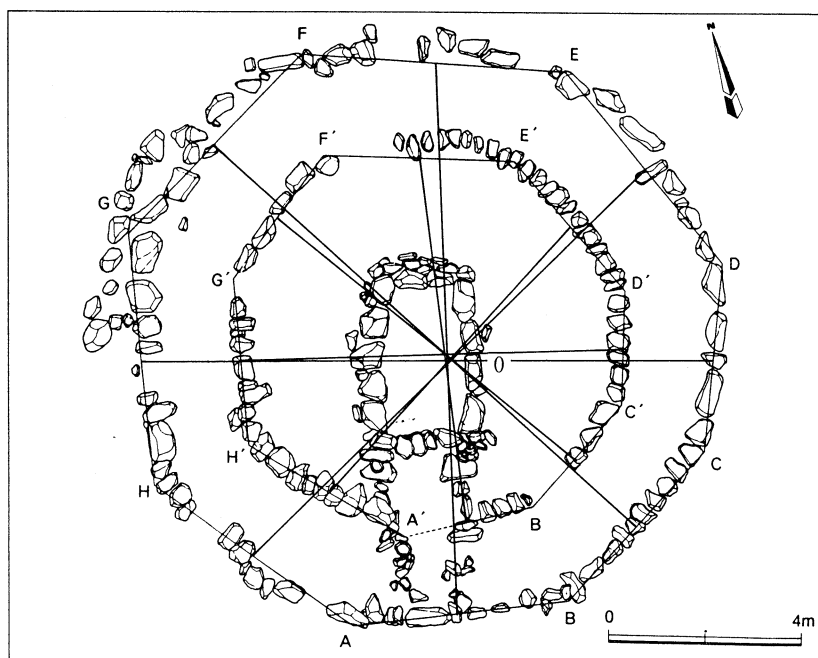
以上、分かり得た事実を列記したが、石室と外護列石・中段列石に若干のズレが生じている点は古墳設計上の失敗であろうかあるいは、何らかの意図があつてこのような結果になったかは明らかにし得ない。古墳築造の過程を順序立てると、まず版築などの基礎工事を施した後に、石室および外護列石の基底部石の設置が想定される。この時点での各部分の歪みはある程度修正できるはずである。しかし、修正が行われなかったのは当時の地形面など、他に何らかの制約を受けたため、このようにせざる負えなかったとも推測できる。

### 4. 八角形墳の分布と築造の意味

八角形墳の出現は、3世紀後半から8世紀初頭にかけての450年間の内の7世紀前半以降、つまり、終末期といわれている。今までその分布は、斉明、天智、天武・持統、文武の4期の天皇陵と中山荘園古墳（兵庫県宝塚市）を加えた近畿地方特有のものとされてきた。しかし、



1



2

第6図 外護列石・中段列石・石室基底部石築造企画平面図

### 外 護 列 石

辺	長さ[m]	高さ[m]	段 数	備 考
A-B	4.50	—	2~3	後方に葺石
B-C	4.25	0.8~1.0	3~4	
C-D	3.98	—	—	
D-E	(5.20)	—	—	
E-F	(5.42)	—	—	
F-G	(5.21)	—	—	
G-H	5.22	—	3~4	
H-A	5.21	—	—	後方に葺石

稜 角	角 度
A	137.5°
B	139.4°
C	143.1°
D	135.0°
E	133.1°
F	130.1°
G	130.0°
H	131.6°

### 中 段 列 石

辺	長さ[m]	高さ[m]	段 数	備 考
A'-B'	3.82	0.78	—	
B'-C'	3.88	0.88	4	
C'-D'	2.44	0.70	4	
D'-E'	3.61	1.05	4~6	
E'-F'	(4.00)	0.90	4	
F'-G'	3.24	1.00	4~5	
G'-H'	3.43	0.90	4	
H'-A'	3.87	0.90	4~5	

稜 角	角 度
A'	134.6
B'	144.2
C'	140.8
D'	137.0
E'	132.5
F'	124.1
G'	138.8
H'	126.1

### 石 室

玄 室	長さ[m]	3.00
	幅 [m]	1.20~1.76
	高さ[m]	1.61
羨 道	長さ[m]	3.60
	幅[m]	0.68 (残存部)
	高さ[m]	—

主要部分の法量

それ以外の地方においても、1991以降、年間1件ほどのペースで発見されつつある。稲荷塚古墳（東京都多摩市）、三津屋古墳（群馬県吉岡町）、梶山古墳（鳥取県国府町）、籠原裏2号墳（埼玉県熊谷市）がそれである。このほかにも、尾市1号墳（広島県新市町）や一本杉古墳（群馬県多野郡）も八角形墳とされているが明確にそれと言い切れる確証はない。

ここでは、それぞれの古墳の概略を述べるとともに、八角形墳の成立について考えてみたい。

#### ①牽牛子古墳

奈良県明日香村の標高約121mの東西に伸びる尾根上に位置する。墳丘の原形、規模は明確にし得ないが、北西部に切石が露呈しており、外護列石を有する八角形墳の可能性を強めている<sup>8)</sup>。

#### ②御廟野古墳

京都府京都市山科区に位置する。方形壇上に対辺長約42m、高さ約7mの八角形の墳丘を築成している<sup>9)</sup>。

#### ③野口王墓古墳

奈良県明日香村に位置する。墳丘は、東西約38m、南北45m、高さ約9mを呈する。また、文暦2年（1235）の盗掘記録である『阿不幾野山陵記』によって当墳が天武・持統天皇陵であること、墳形が五段築成の八角形であることが判明している<sup>10)</sup>。

#### ④中尾山古墳

奈良県明日香村に位置し、南方約200mには高松塚古墳が存在する。三段築成の八角形墳で、対辺長約29.4m、復元高約4mを呈する。石室の規模から火葬骨を収めたのであろうと想定され、立地環境からも文武天皇陵である可能性を強めている<sup>11)</sup>。

#### ⑤中山荘園古墳

兵庫県宝塚市長尾山丘陵上、標高約75mに位置する。墳丘は対角長約13m、高さ約3mを測り、外護列石と、その約1m後方に中段列石？が廻る。また、開口部方向に張り出し部を設けている<sup>12)</sup>。

#### ⑥稲荷塚古墳

東京都多摩市の標高約80mの丘陵南側傾斜地に築造されている。墳丘は幅2mの周溝の内側に対角長約34mで二段築成されている。高さは約4mを復元する。横穴式石室は胴張り形状をとり、全長約7.3mを測る<sup>13)</sup>。

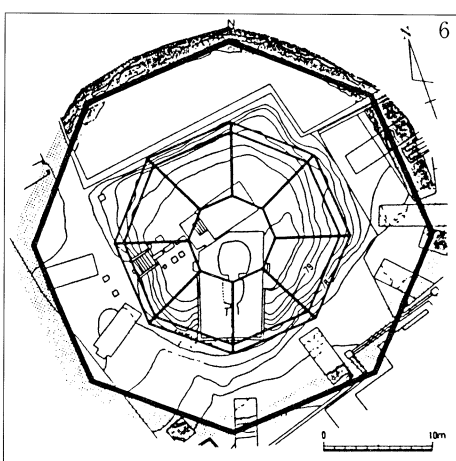
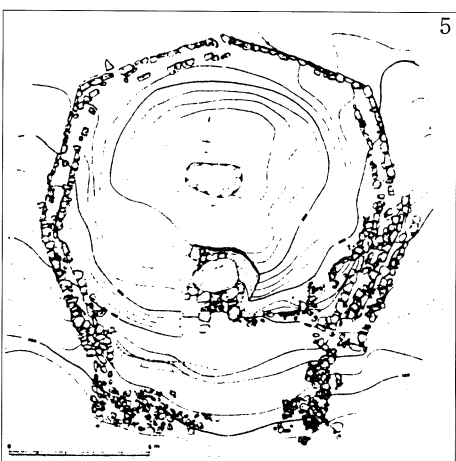
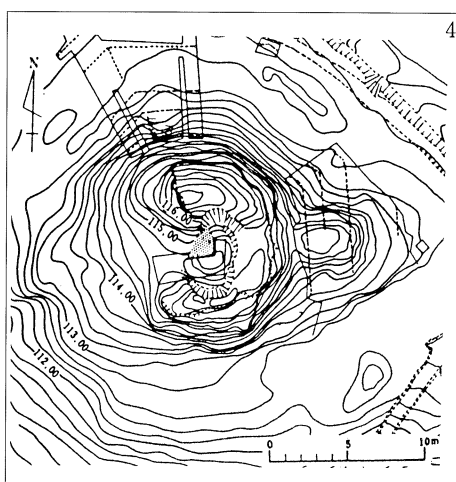
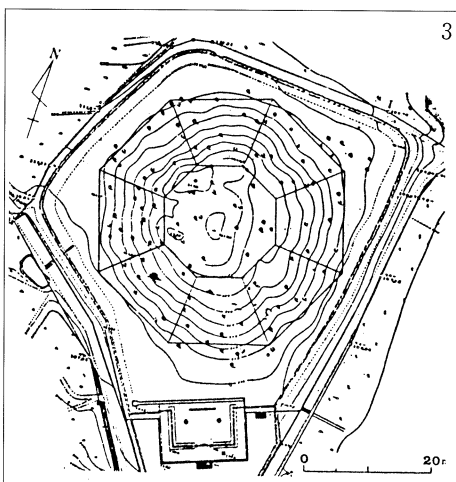
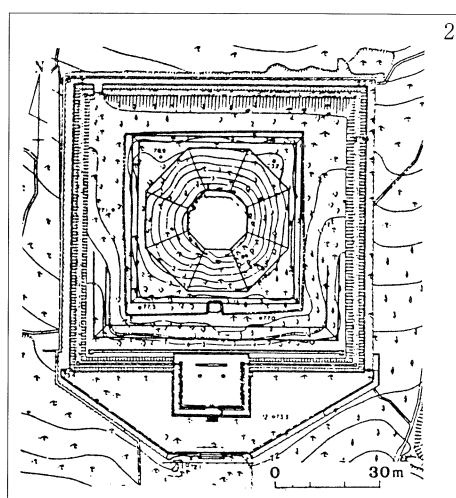
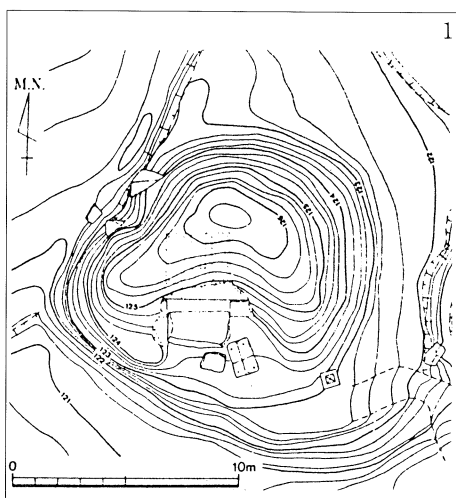
#### ⑦三津屋古墳

群馬県吉岡町の東南部の丘領地に所在する。南側を後世の開発で失われているが、北側に八角形の二段構造を残している。一段目の墳丘の直径約24m、二段目直径約15m、高さ約4mを測る。また、墳丘には自然石を積み上げた葺石が高さ2m残存している<sup>14)</sup>。

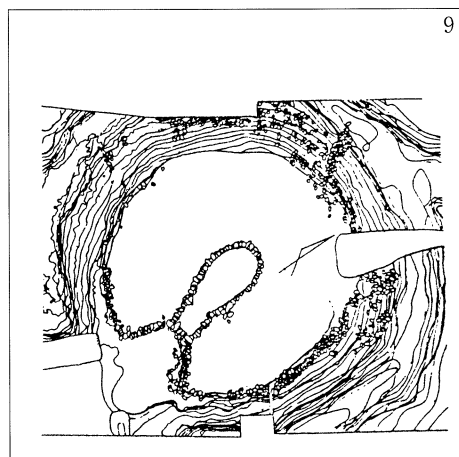
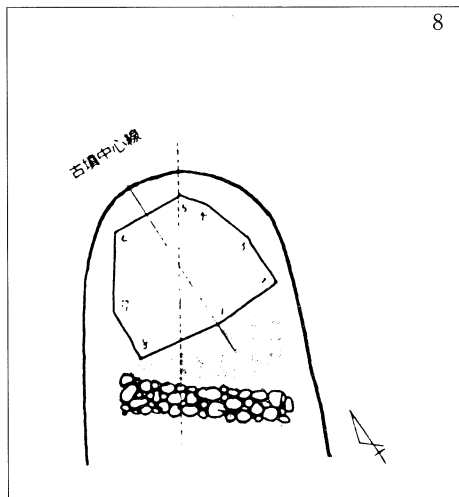
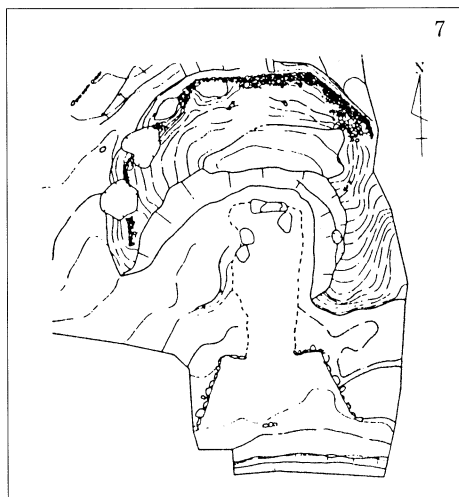
#### ⑧梶山古墳

鳥取県国府町に所在する変形八角形墳。石室には採色壁画が施されている。馬蹄形の尾根上に立地している点などから、地形的制約を受け偶然八角形の墳丘が築成された可能性もある。





第7図全国の八角形墳 1



第8図 全国の八角形墳 2

八角形墳一覧表

	古墳名	所在地	被葬者	築造年代
1	牽牛子古墳	奈良県明日香村	齊明天皇	7世紀後半
2	御廟の古墳	京都府京都市	天智天皇	7世紀後半
3	野口王墓古墳	奈良県明日香村	天武天皇 持統天皇	7世紀後半
4	中尾山古墳	奈良県明日香村	文武天皇	7世紀前半
5	中山荘園古墳	兵庫県宝塚市	?	7世紀後半
6	稻荷塚古墳	東京都多摩市	?	7世紀前半
7	三津屋古墳	群馬県吉岡町	?	7～8世紀初頭
8	梶山古墳	鳥取県国府町	?	7世紀前半
9	籠原裏2号古墳	埼玉県熊谷市	?	7世紀前半

八角形墳の研究を進めて行く上で特異な形が気に掛かるが、単に墳形の変化の過程で生じたものではなく、現在のところ、その成立は仏教思想説と中国政治思想説の二説からなる仮設が立てられており、後者が主流とされている<sup>15)</sup>。

#### －仏教思想説－

538年または552年に大陸より伝来したといわれる仏教思想の中には、釈迦の死後、仏舎利に祀るストゥーパが八つの地方に建立されたことから、八角形には霊廟を象徴するという考えがあり、これから、法隆寺夢殿に代表されるような八角円堂が造られる。また、如来などが鎮座する台座に八枚の花弁を用いていることをも理由としている<sup>16)</sup>。このほかにも、天武天皇の仏教信仰より、八角堂などの建立などと関連させ八角形墳築造の意味を求めようとしたものもあるが、天武天皇同様、仏教崇拝者と考えられる聖徳太子や蘇我馬子らの墳墓に対しても八角形が採用されていなければ不自然であり、説得力に欠く。

#### －中国政治思想説－

八角形墳の誕生を中国の政治制度の中より求めようとしたのが網干善教氏であり、氏は『旧漢書』『礼儀志』や『大唐郊祀録』巻八「祭礼一」－「夏至祭皇地祇」などから以下のような理由を導き出している。これによろると、八角形は「円」から造り出されたものではなく、「方」の概念が強い。皇帝の最も重要な行為である天祭地祀において、天を祭るには円壇をもって、地を祭るには方壇をもって実施するという「天円地方」の思想があり、さらにこれから派生させ「地は方なり」となり、「地」は国家・国土を意味するようになる<sup>17)</sup>。

これらの事柄から、八角形墳の築造に際しては、中国政治思想からくる中央集権体制を地方に対する基盤をより強固に確立させていこうとする前段階の動きのひとつではないかと感じられる。

### 5. まとめにかえて

本稿では、発掘調査報告書では紹介できなかった経塚古墳の設計企画および八角形墳とその成立の意味について取り上げた。ここでは、これらの問題点を整理しまとめにかえることとしたい。

まず、設計企画に関してであるが、本墳においての石室と外護列石・中段列石の他墳にみられないズレの意図や、設計にあたっての基本的な尺度はいかなるものであったろうか。これは、全国の八角形墳との比較とともに、古墳のおかれている金川流域の終末期古墳の詳細な計測値の検討などが必要である。

また、八角形墳とその成立の意味については、地方と中央（畿内）に分けて考えた上で相互のつながりについて検討しなければならない。特に、地方において現時点では、八角形墳相互の関係を追及するのは非常に難しい。しかしながら、古墳成立時期と前後して徐々に地方へ確立されてくる中央集権体制との関わりからの推測は不可能ではないだろう。

最後に小稿を執筆するにあたり、ご教示・ご協力を賜わった。記して感謝の意を表したい。  
古瀬清秀・坂本美夫・小林広和・長沢宏昌 (順不同・敬称略)

#### 註・引用文献

- 1) 山梨県 県政だより 『ふれあい』 No. 188 1994
- 2) 小林広和 他 「甲斐国分寺周辺における後期古墳の一樣相」『古代学研究』77 1995. 9
- 3) 坂本美夫氏に御教示頂き作成した。
- 4) 脇坂光彦 「八角形墳」『季刊考古学』40号 雄山閣出版 1992
- 5) 桐生直彦 「八角形墳の新例」『東京の遺跡』東京考古談話会 1991. 6. 30
- 6) 兵庫県教育委員会 『中山荘園古墳』 1985
- 7) 外護列石、中段列石ともに八角形のプランを想定するのに本墳の場合、辺を基本としているため、陵角を結線させないで辺の中点を結ぶこととした。
- 8) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 『飛鳥時代の古墳』 同朋社 1979
- 9) 註4) に同じ
- 10) 註8) に同じ
- 11) 註8) に同じ
- 12) 註6) に同じ  
兵庫県教育委員会 「中山荘園古墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』 1986
- 13) 註5) に同じ  
財団法人多摩市文化振興財団 『発掘調査速報展資料』 1992
- 14) 瀧野 巧 「群馬県北群馬郡吉岡町三津屋古墳」『日本考古学協会年報』46 1995
- 15) 日本海新聞 記事 1994. 7. 20  
朝日新聞社 『アサヒグラフ』 1995. 12. 29
- 16) 菅谷文則 「八角堂の建立を通じてみた古墳終末期の一樣相」『論集終末期古墳』塙書房 1973
- 17) 網干善教 「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集』第五 吉川弘文館 1979

#### 参考文献

- 網干善教 「古墳築造の企画と設計」『季刊考古学』3号 雄山閣出版 1983
- 吉岡弘樹 「経塚古墳」『遺跡調査発表会要旨』山梨県埋蔵文化財センター 他 1994
- 吉岡弘樹 「経塚古墳の調査」『帝京大学山梨文化財研究所報』第24号 帝京大学山梨文化財研究所 1995
- 吉岡弘樹・山崎一良 「古墳は語る①～④」『朝日新聞連載』 1994
- 兵庫県安富町教育委員会 『塩野六角墳』 1994
- 兵庫県安富町教育委員会 『塩野岡ノ上2号墳現地説明会資料』 1991

山梨県教育委員会 他 『四ツ塚古墳群』 1985

新市町教育委員会 『尾市 1 号古墳発掘調査概報』 1985

読売新聞 記事 1995. 5. 28